

## 漱石の大阪

辻 憲男（文学部教授）

「梅田の<sup>ステーション</sup>停車場を下りるや否や、自分は母から云いつけられたとおりに、すぐ俵（くるま）を雇って岡田の家に馳（か）けさせた」。東京からお貞の縁談の相手に会いに来た。「どうしてお貞さんが、そんなに気に入ったものかな。まだ会った事もないのに」「佐野さんはああいうしっかりした方だから、やっぱり辛抱人をお貰いになるお考えなんですよ」。そう言う岡田夫婦といっしょに、天下茶屋から浜寺まで出かけた。夏の短髪<sup>せいか</sup>のせい、佐野は写真よりおデコに見えた。「どうも写真は大阪のほうが東京より発達しているようですね」と言うと、岡田が「浄瑠璃じゃあるまいし」とまぜかえした。佐野と別れてから、岡田が「どうです」ときくので、自分は「よさそうですね」と答えた。無責任なような気がしたが、同時に「この無責任を余儀なくされるのが、結婚に関係する多くの人の経験なんだろうとも考えた」（夏目漱石『行人』）。

明治44年（1911）、漱石は関西に講演旅行に来た。明石の料理屋で大食し、イイダコを全部たいらげた。前年の胃潰瘍が再発し、大阪で緊急入院した。「だってタコなんかを食うんだもの」となじられると、うつぶせのまま「タコっていうだろうと思った」と顔の筋肉だけ動かして笑った。…小説はこのあと、自分と兄と兄嫁との奇妙な関係に深入りしていく。なんと、人間の作った夫婦という関係よりも、自然が醸（かも）した恋愛のほうが神聖なのではないか、云々と。

梅田は今のJR大阪駅。この頃最大級の駅で、江戸っ子漱石も一驚したようだ。



大阪天下茶屋の<sup>はせがわにょぜん</sup>聖天山。漱石はこの地に長谷川如是閑を訪ね、堺の浜寺で会食したことがある。タコの話も長谷川の回想談